

5. 次亜塩素酸ナトリウムにより消毒した種子のみわけ方

1. 背景と特徴

キュウリ斑点細菌病を主体に種子伝染性病害の防除法として標記薬剤による種子消毒が一般に行なわれてきた。

しかし、この薬剤による消毒法は薬液の濃度および浸漬時間を誤ると不発芽、発芽不揃いなど薬害が発生するので、特に浸漬時間は厳守されなければならない。このことから採種地（たね屋）で消毒し、さらに栽培地で消毒するという二重の消毒を避けるため、標記薬剤で消毒された種子の簡単な判別法を紹介する。

2. 技術内容

- (1) 用具 インク（色は指定せず油性のものは不可）
 皿 （底の平らなもの ex シャーレ）
 ろ紙（脱眠綿、ティッシュペーパーでも可）
- (2) 方法 皿にろ紙を敷き、インクをろ紙が十分しめる位に入れる。その上に種子をピンセットで静かに置く。
- (3) 判別法 消毒済みの種子は1～2分後には毛細管現象で種子の上部に色がにじんでくる。
 無処理の種子は変化が起きない。

3. 普及上の留意点

- (1) アンチホルミン5%の20倍液30分浸漬（標準防除法）では発芽障害は起きないが、発芽が1～3日遅れた例があったので浸漬時間は十分に注意すること。さらに二重消毒することにより発芽障害を起すおそれがある。
- (2) 判別用種子は2～3粒でよい。

6. 半促成イチゴ栽培におけるハウスビニールの被覆時期について

1. 背景と特徴

南部沿岸地方のイチゴ栽培は1月下旬にハウスビニールを被覆（2月上旬に内部トンネル保温を開始し収穫盛期を5月とする半促成栽培が主体である。

この栽培型は5月以前を収穫期とする関東、南東北の栽培型と6月が収穫期である露地栽培の中間を狙うものとして定着している。この作型の問題点としては過繁茂や冬期自然状態

に在る間の乾寒風による冬枯れなどが大きなものである。

当分場はこれらのことを考慮して、ハウスビニールの被覆時期を検討した結果その概要をとりまとめたので参考に供したいと思う。

2. 技術内容

(1) ハウスビニールの早期被覆

(ア) 草高の抑制、収量、品質の両面からみて被覆時期は11月下旬～12月上旬とする。

慣行の1月下旬被覆は結果が劣る。

(イ) 冬期の株保護（新生葉、腋芽、花芽の保護）の点でもビニール被覆時期は11月下旬～12月上旬が良い。

適応地帯 — 冬期積雪少く、乾寒風による土壌の凍結、乾燥する地帯

(ウ) この場合の技術内容は、内部保温を慣行的に1月下旬～2月上旬とした場合に適應するものとする。また品種はダナーとする。

3. 普及上の留意点

(1) ハウスビニール被覆後内部トンネル保温開始までの温度管理

昼間最高温度 15°C を越えないように換気する。

(2) 灌水

ハウスビニール被覆後土壌が乾燥して来たら灌水すること。

4. 試験成績の概要

(1) 試験課題名 半促成イチゴ栽培におけるハウスビニール被覆時期試験

(2) 試験年次 昭和49年岩手県園試南部分場

(3) 試験方法

ア 試験区	ハウスビニール被覆時期 11月20日, 12月10日, 12月30日, 1月10日, 1月20日(慣行)
イ 一区面積および区制	1区 1.8m^2 2区制
ウ 供試品種	ダナー
エ 栽植距離	畦巾 147cm ×株間 17cm 2条 10a当8,003株
オ 供試苗状況	8月21日に本葉4枚で直径 30cm のポリポットに仮植
カ	ハウスビニール被覆時期と内部保温開始時の低温経過量

区 番	ハウスビニール被覆期 (外部被覆)	5°C以下低温経過量	
		ハウスビニール被覆時	内部保温開始時
1	11月20日	241 時間	1,283 時間
2	12月10日	564	1,388
3	12月30日	1,038	1,519
4	1月10日	1,271	1,575
5(漬行)	1月20日	1,511	1,664
6(参考)	11月20日	241	1,283

(注) 区番1～5は大型ポット植のものを被覆時期にパイプハウス内に移動、ポットをはずして植付

区番6(参考)は9月20日パイプハウス内に定植、ハウスビニールを11月20日に被覆

キ ハウスビニール被覆後の温度管理 最高気温150°C以上にしないことを目標

ク 内部保温開始 1月31日

(4) 試験結果の概要

ア 新生葉と腋芽数

内部保温開始直後の新生葉の葉数、大きさとも11月20日、12月10日、12月30日区が優れており、1月10日、1月20日区が劣った。腋芽数は被覆のおくれた区ほど減少した。

イ 草高

11月20日区が最も低く、次いで12月10日区が低い。明らかにハウスビニール被覆のおくれるに従って高くなる傾向がみとめられた。

ウ 花房数、着花数

1月20日被覆がよかった

エ 収量、品質

収量は11月20日区が最も多く、被覆時期のおくれるほど減少し、1月20日区が最も低収を示した。

大果率、良果率とも11月20日、12月10日被覆が高かった。

以上の結果からハウスビニールの早期被覆は草高の伸長抑制と冬期の株保護に効果のあることおよび増収と品質向上に結びつくことが認められる。

被覆時期はハウスビニール被覆のみの操作(内部保温開始は従前どうり1月31日頃とした場合)では11月下旬～12月上旬が過繁茂防止と冬枯れ防止の両方に効果的と考えられる。